

コロナ・母・現在

吉行 和子

(女優・エッセイスト・俳人)

私が「コロナ」という名前を知った日は、はっきり覚えていて。

狭いセットの中でドラマの撮影を続けていた。その日は喉の調子が悪く、やたらに咳をした。「風邪ではありませんからうつしません」と言い訳をしながらやっていったのだが、翌日、周りのスタッフが全員白いマスクをしているのに気がついた。奇妙な光景だった。毎日見えていた顔が、まるで知らない人たちに囲まれてしまったような、別世界に連れてこられたようなヘンな雰囲気。

一緒に出ていた藤竜也さんに、どうしたのかしら、と聞くと、まだ公にはなっていないけど、

コロナウイルスというのが発生して、世界に拡散し始めている、ということを知っていた、皆んなに注意したのでしよう、との答え。とはいえ、出演している私達は、マスクをするわけにはいかなないので、その変わってしまった人たちに囲まれながら撮影を終えた。「コロナ」という言葉は一度も出てこなかった。

作品が出来上がり、何週間目に、記者会見と試写会が行われることになっていったのだが、その時、「コロナ」のため中止と申し渡された。あの時から三年も経ち、今でも目に見えないウイルスが飛びまわり、感染者の数が毎日テレビで報道されている。

コロナの話が出はじめた頃、百年前の「スペイン風邪」の例がよく出てきた。スペイン風邪は母の定番だった。昔の話をほとんどしない母なのだが、スペイン風邪の話は繰り返し聞かされていた。姉二人がスペイン風邪に罹り、見舞

吉行和子（よしゆき・かずこ）



東京生まれ。1954年「劇団民藝」に入団。57年、舞台「アンネの日記」でデビュー。『愛の亡霊』（78）『東京家族』（2013）で

日本アカデミー賞優秀主演女優賞を受賞。02年『折り梅』で毎日映画コンクール田中絹代賞を受賞。主な出演作に映画『佐賀のがばいばあちゃん』『おくりびと』『人生、いろどり』『燦燦』『家族はつらいよ』『雪子さんの足音』など。エッセイ集『どこまで演れば気がすむの』（1983）で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。

いに行った父親にもうつり、三人とも死んでしまった。家は人に騙され没落し、十五歳のあぐりは、学校を続けさせてあげるという条件で、近所の吉行家に貰われていった。

「それでね」と母は言う。お姉さんが死ぬ時、残りの命はあぐりに上げる、と言ったのよ、だから私はこうして、いつまでも、いつまでも、生きているのよ、元気なうちは有難いことだと感謝もしたけれど、ここまで来ると、いいかげん嫌になっちゃって、一体、いつまで生きていればいいのでしょうか、と百七歳の母は嘆く。

仕事が大好きで、九十七歳まで続けていた。パーマネットが未だ日本に入って来ていない時から、美容の仕事をして、後年は、小さな美容室で、長いこといらしてくださいっているお客様何人かを相手に、一人で働いていた。それが三回続けて骨折して、とうとう歩けなくなってしまう。百歳からの七年間は、自宅で寝たきりになった。何でも自分でやりたかったのに、全てを人の手を借りなくては駄目になったのは、見ているこちらも辛かった。

しかし、見事に文句も言わず、「ありがとう

「ごきます」とヘルパーさん達に礼を言いつつ静かに寝ていた。それでも時々私の顔を見ると、「何で私はこうまでして生きてなきやならないの、スペイン風邪のせいね、お姉さん達はどれだけ命が残っていたというのかしら」とボヤいていた。このコロナウイルスの話が出まわった時、母が知ったら、むしろ懐かしく昔を思い出したかも知れない、と私は思った。

しかしここまで長引くとは、誰が想像しただろう。私が生きている間には、コロナが消えるとは思えなくなつた。

私の楽しみは海外旅行をすることだった。仕事以外、これという趣味の無い私は、知らない国を見てみたい、というのが楽しみだった。その為に一生懸命仕事もした。コロナ騒動の前に十年間有効のパスポートを更新した。ちよつと無駄よね、と思いつながら、そんな弱気でどうする、と自分を励ました。ところがどこにも行けないではないか、どうするこのパスポート！

先日思いついてプラネタリウムに行った。十代の頃、胸ときめかせて入ったあの空間、人生二度目。ビルに囲まれている私の家からは、

空を見上げるのも難しい。今さらとも思ったが、これが思いのほか楽しかった。星が見えるのは当たり前だが、見たことのない景色が現れ、木々が茂り、花が咲きみだれ、うつとりしていたら、突然水の音、もうすっかり忘れていた川の流れる音だった。何て気持ちのいい音だろうと驚いた。まだもう少し自分を楽しませて生きていかなくては、自分を楽しませるのは、自分しかない。また何か考えよう。